優秀賞

墨を磨く時間と生命保険の温もり

栃木県　白鷗大学足利中学校　二学年

趙　熙曄

私には、将来「書道家になる」という夢がある。毎回すずりに水を数滴落とし、静かに墨を磨る。最初は何の変哲もない透明な水だが、心を落ち着かせて時間をかけるうちに、だんだんと黒へと変わっていく。墨の香りが部屋に漂うと、すーっと研ぎ澄まされていくような気がして、私はこの時間がとても好きだ。

夏休みの宿題として「生命保険」について調べることになったとき、正直に言って最初はピンとこなかった。中学生の私にとって、保険というのは大人が考える難しそうな書類の一つに過ぎなかったからだ。〝命に保険をかける〟という表現も、なんだか冷たい感じがして少し苦手だった。しかし、この課題をきっかけに母と話したり、自分なりに調べたりする中で、その印象は大きく変わっていった。

書道の道具には、筆や墨、半紙など様々なものがある。けれど、どんなに良い筆や紙があっても、それを支えるしっかりとした机や下敷きがなければ、納得のいく書を書くことはできない。普段は目立たない下敷きだが、一枚あるだけで紙が滑らず、思い切って筆を走らせることができる。私にとって生命保険とは、まさにこの下敷きのような存在なのではないかと思うようになった。

家族の誰かが病気になったり、思いがけない事故に遭ったりしたとき、人は大きな不安に包まれる。医療費がかかるだけでなく、働けなくなれば生活そのものが立ち行かなくなるかもしれない。そんな「もしも」のときに、経済的な支えとして家族を守る仕組みが生命保険だ。

私は将来、自分の書で人の心を動かせるような書道家になりたいと思っている。でも、芸術の道を進むには、きっとたくさんの努力や苦労が必要だし、すぐに食べていける保証もない。それでも私が今、安心して書道教室に通い、将来の夢に向かって真っ直ぐに筆を握ることができるのは、陰で両親がしっかりと生活を支えてくれているからだ。そして、その両親の安心を陰で支えているのが、生命保険という目に見えない備えなのだと気づいた。

保険は決して〝冷たいお金の話〟ではない。そこには、『万が一のことがあっても、残された家族に不自由な思いをさせたくない』『子供の夢を最後まで応援したい』という、家族に対する温かい愛や願いが込められている。だからこそ、みんな目に見えない安心を買い、未来に備えているのだと思う。

一本の線を引くとき、迷いがあると墨が滲んだり、線が震えたりしてしまう。

未来に向かって自分の人生という紙に線を引くときも同じかもしれない。「もしも」に対する不安を減らし、安心してチャレンジできる環境があるからこそ、人は思い切って自分の夢に挑むことができる。

私はこれからも墨を磨き続け、自分の目指す書道家という夢に向かって突き進んでいきたい。そして将来、自分が大人になり、大切な家族ができたときには、私も生命保険というカタチでその笑顔を守れるような、頼もしい存在になりたいと思う。